

—特集— 閲覧室の現状と問題点（その5）

工 学 部

工学部は、23学科、教官数約630名と3,300名を越える学生（院生を含む）を擁し、京都大学のなかでは最大の学部である。この工学部の図書室とその閲覧部門はどうなっているであろうか。工学部の学科図書室名と座席数は下図のとおりである。

工学部学科図書室および閲覧座席数

図 書 室 名	閲覧座席数		
	41年度	47年度	増 減
1. 土 木 系 土木工学・交通土木 衛生工学	40	80	+40
2. 機 械 系 機械工学・機械工学第2 精密工学	24	40	+16
3. 電 気 系 電気工学・電気工学第2 電子工学	50	43	- 7
4. 金 属 系 資源工学・金属加工学 冶金工学	10	30	+20
5. 工業化学	28	28	0
6. 建 築 系 建築学・建築学第2	10	16	+ 6
7. 石油化学	10	24	+14
8. 化学工学	26	12	-14
9. 高分子化学	23	29	+ 6
10. 航空工学	10	20	+10
11. 原子核工学	14	20	+ 6
12. 数理工学	24	20	- 4
13. 合成化学	12	12	0
14. 情報工学	45年度 新 設	20	+20
※ 衛生工学	10	42年度 土木系 に合併	-10
合 計	291	396	+103

工学部には、理学部と同じように学部図書室はない。学科図書室は、23学科のうち土木系学科のように2～3学科が共同で運営しているところがあるので、現在は14カ所の学科図書室が設置されている。座席数をみると、41年度から47年度までの6年間で増えたところは9図書室である。これらは学科の新設（航空工学）と学科の建物の改築・増築などの機会に拡張されたものである。全く増えていない工業化学、合成化学の両学科は、41年度までに改築されていることを考えると、学科図書室は学科の建物の改築・増築がなければ拡張の可能性はない、といっても誤りではないであろう。閲覧部門の拡張が改築の機会だけでなく、そのうらに、図書室が見直されてきたのか、特に学生のためにという配慮があるのかどうかは解らないが、図書室の充実、閲覧室の整備に注意が払われていることは喜ばしいことである。しかし、一方では座席数が減っている学科がある。まず衛生工学科は図に示した通りであるが、化学工学科は新築のためにむしろ減少している。電気系図書室（昭和38年新築）と数理工学科図書室（昭和37年新築）は、蔵書の増加のために

書架スペースを拡大しなければならなくなったためである。新築して約10年で現われているこの現象は理学部と同じで、学科図書室のすべてが、近い将来、直面するに違いない。その場合に閲覧席はどうなるのか、深刻な問題である。

工学部の建物のほとんどが新しいので、閲覧室は明るく、机も椅子も整い、座席数も117席増えている。それにもかかわらず、工学部学生が理学部の各図書室をよく利用し、また附属図書館の利用も多い（法学部に次いで2位）。このたびの調査では、閲覧席利用と図書利用の関係については行なわなかったが、機会があればその実態を追究する必要があると思っている。それによって、図書館のあり方、閲覧室のあり方についての指針がえられるのではないだろうか。

（編集委員）